

最悪のことにも良い側面がある

Return From Nightmare

美宅成樹 Shigeki MITAKU

昨年秋、東北大学サイエンスエンジェルの企画（スキルアップ講習会）で話をする機会があった。最初は「はじめての科学英語論文」という拙著をネタにスキルアップの話をしよと思ったのだが、気が変わって話はこの文のタイトルのようなものになってしまった。

30歳代の中頃と言え、研究も最も脂が乗った時期である。私も毎週のように徹夜の実験を行い、アイデアも豊富だった。しかし、やりすぎた。1月のある日、朝まだ辺りがほの暗い頃妙な感覚で目を覚ました。頭の中に言葉がなにもない。変だなと思いつつ、変だなという言葉はない。救急車で運ばれて、すぐに病院に入院したが、脳こうそくの発作からくる感覚性失語症だった。幸運にも、今はこのように文章を書くことができるようになっているが、それは長期間のリハビリの結果である。医者も周りも回復するとは考えていなかったと思う。

発作以来、すでに25年の歳月が流れたが、それを振り返ってみると、また奇妙な感覚に襲われる。「脳梗塞失語症という最悪な事態がなければ、私の研究の発展と社会的な貢献はなかったのではないか。」もちろん脳梗塞失語症をそのままにしていれば、研究者として致命傷となっていたことは間違いない。しかし、それを必死のリハビリで回復していくプロセス自体が、私の研究者としてのステップアップにつながっていた。言語のリハビリには、とにかく言葉を使うことが必要である。最初は日本語もおぼつかない。そこでまず文章を書くことを努力した（言語を失っても、イメージは全く失われていないので、いかにイメージを言語で表現するかを訓練する）。

私の病気のことを知ってか知らずか、文を依頼してくれる。それを見て、文章がなかなかうまいと、また依頼をしてくれる。そのうち、英語の分厚い本の翻訳を依頼された。これも必死に一年間かけて、翻訳した。文字数にして20数万字になっていたと思う。それが7万部を超えるサイエンス分野ではなかなかの売れ行きとなった。翻訳がなかなかうまいとまた依頼を受け

る。失語症となったとき、日本語のリハビリをすれば英語も同じように回復するかと思いきや全くそういうことはない。独立にリハビリをしなければならない。いつの間にか「はじめての科学英語論文」というような本の翻訳も手がけ、それをたまたま読んだ人がサイエンスエンジェルの講習会に呼んでくれたのである。リハビリだけではなく、同時に社会的な貢献もできるという予想外の展開であった。

実は、私の脳梗塞で失われた能力の中には、いまだに復活していない部分（耳から聞いた言葉の短期記憶など）がある。しかし、逆にそれを補うように発達したと思われる能力もある。言葉での記憶がすぐ消えるので、できるだけ早くイメージの世界に移すように努力をしてきた。それで脳の中での処理はイメージの世界でかなりやっているような気がする。実験や計算の結果は、イメージの世界で処理するが、その部分を強化するような訓練を日常的にやってきたことになる。これが研究のステップアップにもかなり役立っているのではないかと思う。

このように研究面でも社会的にも、私は病気によって大きくギアチェンジできたと思うが、最大のギアチェンジは、「研究を含めて自分がやっていることは、すべて脳の働きを通して行っている」ということを、身をもって本当に理解したという点にある。脳の小さな領域が壊れるだけで言葉がなくなるということは、客観的なことを語っていてもそれは自分の脳を通して語っていることを示している。研究でも社会的にも、多くの錯覚によって理解が阻まれているのではないかと考えるようになった。自分の中にある錯覚のペールを一枚ずつはがしていく作業が研究であるとさえ最近では思われる。

短期的には悪い状況があっても、長期的にも最悪の事態が続くとは限らない。むしろそれをバネに自分が大きくステップアップすることができるチャンスかもしれないのである。



美宅成樹 Shigeki MITAKU

名古屋大学大学院工学研究科マテリアル理工学専攻応用物理分野
東京大学理学部物理学科1971年卒業。東京大学大学院理学系研究科博士課程物理学専攻1976年単位取得退学（1978年理学博士）。1976-80年東京大学工学部物理工

学科助手。1980-2003年東京農工大学助教授／教授。2003-年名古屋大学大学院工学研究科教授。2005-2007年日本生物物理学会会長。2008-09男女共同参画学協会連絡会第5期委員長。2008-学術会議連携会員。若い人たちに、研究の楽しさを伝えたいいつも思っています。